

第四章 第一年次研究開発のまとめと今後の課題

1 研究の経緯

本研究開発を進めるにあたり、本学園では次のような会議や研修会を行うことで研修推進を行った。次にあげる各委員会などの趣旨は、前述（P. 13「4. 研究組織」）の通りである。

- (1) 運営指導委員会
- (2) 研究開発委員会
- (3) 研究主任会
- (4) 全体研究部会
- (5) 各プロジェクト部会（国際交流学習開発部会、マルチメディア学習開発部会、幼小連携学習開発部会、小中連携学習開発部会、教科外学習開発部会、クラブ・行事学習開発部会、調査・評価部会）
- (6) 研究会事務局会議
- (7) 幼小中一貫教育公開研究会
- (8) 「研究開発だより」発行
- (9) その他

ここでは、これらの会議・研修会の経緯について、その種類ごとに記述する。

(1) 運営指導委員会

- ① 6 / 26 (木) 第1回運営指導委員会（会場：広島大学）
 - ・第1年次の学園研究構想及び各部の研究構想の提案
 - ・研究構想及び第1年次の研究推進に対する指導・助言<参加者>
 - 運営指導委員
石井眞治・三浦省五・二宮皓・森敏明・角屋重樹（広島大学）
 - 本学園職員（学園長・三副学園長・部会キャップ）
- ② 7 / 3 (木) 第2回運営指導委員会（会場：本学園）
 - ・国際交流学習開発に関する授業提案（小学校第5学年）
 - ・マルチメディア学習開発に関する授業提案
（小学校第4学年・中学校第3学年）
 - ・第1年次の学園研究構想及び各部の研究構想の提案
 - ・研究構想及び第1年次の研究推進に対する指導・助言<参加者>
 - 運営指導委員
天笠 茂（千葉大学）・北 俊夫（岐阜大学）
二見吉康（広島県教育委員会）・奥 典道（尾三教育事務所）
植木章弘（三原市教育委員会）
 - 本学園職員
- ③ 7 / 7 (月) 運営指導委員長片上宗二先生（広島大学）との会合

- ・参加者・・・3名（小学校副校長，小学校研究主任，調査・評価部員）
 - ・第2回運営指導委員会の報告および今後の研究の方向性についての指導
- ④2/17（火） 第3回運営指導委員会
- ・幼小連携学習開発に関する授業提案（小学校第2学年）
 - ・小中連携学習開発（社会科）に関する授業提案（小学校第6学年）
 - ・国際交流学習開発に関する授業提案（中学校第1学年）
 - ・第1年次の研究全般に対しての指導・助言
- <参加者>
- 運営指導委員
 - 片上宗二（広島大学）・天笠 茂（千葉大学）
 - 北 俊夫（岐阜大学）・田中博之（大阪教育大学）
 - 三浦省五・石井眞治（広島大学）・植木章弘（三原市教育委員会）
 - 本学園職員

（2）研究開発委員会

研究開発委員会は、定例の会議を月の最終週に開催している。また、研究推進にかかわる重要な事項がある場合には、それ以外にも開催した。今年度の研究開発委員会の開催は、次の通りである。

- 5/29（木） 研究開発予算関係について、今年度の研究会の開催の方法について、5月の各部会の活動状況の交流，他校視察訪問について，研究会事務局提案，「研究開発だより」の発行について，
- 6/23（月） 第1回運営指導委員会について，平成15年度研究開発学校連絡協議会の報告，6月の各部会の活動状況の交流，研究会事務局提案，「研究開発だより」の発行について，
- 7/17（木） 学園研究構想プロット提案，第1回運営指導委員会の報告，夏季休業中の研修予定に関すること，調査評価部会計画による構想交流会の予定について，「研究開発だより」の発行について，研究会事務局提案，7月の各部会の活動状況の交流
- 7/25（金） 学園研究構想プロット審議，先行研究の資料収集に関する研修についての提案，夏季休業中の研修予定に関すること
- 9/25（木） 学園研究構想の提案・審議，研究会事務局提案，夏季休業中・9月の各部会の活動状況の交流，平成15年度研究開発学校連絡協議会の質問状に対する回答について
- 10/28（火） 学園研究構想の提案・審議，研究会事務局提案，研究会事務局提案，10月の各部会の活動状況の交流
- 11/ 4（火） 教育公開研究会に関すること
- 1/ 7（水） 平成15年度研究開発実施報告書の作成について，平成16年度研究開発計画書の作成について，来年度の研究組織について，「研究開発だより」の発行について，研究会後の各部会の活動状況の交流，研究会事務局提案
- 2/10（火） 平成15年度研究開発実施報告書について，平成16年度研究開発計画書の作成について，来年度の研究組織について，次年度の研究会の持ち方について，「研究開発だより」の発行について，1月の各部会の活動状況の交流
- 2/25（水） 平成15年度研究開発実施報告書について，平成16年度研究開発計画書の作成について，来年度の研究組織について，次年度の研究会の持ち方について，「研究開発だより」の発行について，2月の各部会の活動状況の交流

- 3/24 (水) 平成15年度研究開発実施報告書について、来年度の研究組織について、次年度の研究会の持ち方について、「研究開発だより」の発行について、カリキュラム作成について、3月の各部会の活動状況の交流

(3) 研究主任会

研究主任会は、研究開発委員会で提案する内容の原案作成や、教育公開研究会開催にあたっての事務的内容の原案作成などを行った。そのため、研究開発委員会の前後に常に2～3回、研究会事務局会議の前後に2～3回を開催した。第1年次の開催数は、約40回である。

(4) 全体研究部会

本年度は、全学園の教職員で開催する全体研究部会に主軸を置かず、各プロジェクト部会中心の研究推進体制をとったこともあり、全体研究部会を行ったのは、次の通りである。

- 5/12 (月) 研究開発学校の指定に関する報告
- 6/11 (水) 今後の研究推進について
- 8/21 (木) ・23 (土)
各部会研究構想交流会 (学園全教職員対象)
大阪教育大学 田中博之先生による指導・助言
- 10/29 (水) 学園研究構想審議、一貫教育公開研究会の打ち合わせ
- 11/7 (金) 小原友行校園長による講演会
「21世紀型の授業とは」
- 12/17 (水) 一貫教育公開研究会反省・第2年次の研究会の方向性について

(5) 各プロジェクト部会

今年度の研究推進の中心は、7つのプロジェクト部会である。そこで、次にあげる各部会の研究の概要は、各部会ごとに計画立案、実施されたものである。

①国際交流学習開発部会

・部会開催数・・・17回

(4/17・24, 5/8・15・22・29, 6/19・26, 7/7・17・29, 8/8, 10/16, 11/6・13, 12/4, 1/6)

・部会の内容・・・題材開発, 子どもの実態調査に関するアンケート項目検討, アンケート集計及び分析, 研究授業事前研究, 領域構想検討, 研究会の授業に関する検討, 研究会打ち合わせ, 共同研究について, 次年度の方向性 など

・研究授業

- 7/3 (木) 小学校第5学年 (運営指導委員会提案授業・小中TT方式)
- 7/11 (木) 小学校第1学年
- 11/17 (月) 小学校第3学年・第5学年, 中学校第1学年
- 2/17 (火) 中学校第1学年 (運営指導委員会提案授業)

・外部講師による研修

- 1～3月 (5回) 元JICA派遣職員の方による学習会
- 2/18 (水) ・3月
広島大学 松浦 伸和教授による評価に関する講演及び指導
- 3/2 (火) 関西大学 齋藤 榮二教授による講演及び指導

②マルチメディア学習開発部会

・部会開催数・・・15回

(4/12・27, 5/28, 6/19, 7/8, 8/8・29, 10/8・25・27,
11/26・28, 12/13・25, 1/4)

・部会の内容・・・研究会に向けて、共同研究について、学会打ち合わせ、学会報告、科研について、研究会の打ち合わせ、今後の方向性 など

・研究授業

- 6/25 (水) 小学校第4学年, 第6学年
- 7/3 (木) 中学校第3学年 (運営指導委員会提案授業)
- 7/8 (火) 研究保育, 小学校第4学年, 小学校第6学年

・外部講師による研修

- 8/5 (火) CIEC
- 1/15 (木) 「メディアについて」講師：朝日新聞記者上野満男
- 3/1 (月) 「総務省メディアリテラシービデオ教材『ストーリーは君しだい!』に関する研修会
講師：TBSビジョン 海老澤寛・田中守・高橋典代

③幼小連携学習開発部会

・部会開催数・・・40回

(4/3・11・24, 5/13・22・27・30, 6/16・17, 7/22, 8/5・
7・8・18・19・28, 9/9, 10/6・14・23・28, 11/6・7・11・
12・17・18・19・25・28, 12/10・15, 1/8・15・22, 2/3・9・
18・20)

・部会の内容・・・今年度の研究計画, 小学校第1学年の子どもの実態把握, 小学校第3学年の子どもの実態把握に関する視点作り, 小学校第3学年の子どもの実態について, 研究の方向性について, 研究構想検討, 単元検討, 学年別目標及び内容について, 研究授業事前研究, 研究会打ち合わせ, 研究会シンポジウムのビデオ視聴, 研究会反省, 来年度の研究計画検討, カリキュラム・評価の検討 など

・研究授業

- 5/1 (木) 音楽科 (小学校第3学年)
(小学校第3学年の実態把握の授業研究に向けての視点作りのための授業研究)
- 5/12 (月) 社会科・国語科 (小学校第3学年)
(小学校第3学年の実態把握)
- 5/13 (火) 総合的な学習の時間 (小学校第3学年)
(小学校第3学年の実態把握)
- 5/14 (水) 体育科・国語科・理科 (小学校第3学年)
(小学校第3学年の実態把握)
- 7/1 (火) 保育 (Bグループ) (幼稚園年長)
(実態把握及び構想作りに向けての研究保育)
- 7/4 (金) 保育 (Aグループ) (幼稚園年長)
(実態把握及び構想作りに向けての研究保育)
- 7/16 (水) 保育 (Aグループ) (幼稚園年中)
(実態把握及び構想作りに向けての研究保育)

- 11 / 4 (火) 表現科 (小学校第1学年)
- 2 / 17 (火) 「環境科」(仮称) (小学校第2学年)
(運営指導委員会提案授業)

④小中連携学習開発部会

- ・部会開催数・・・4回 (5 / 26 (月) : 研究の方向性と研究会の持ち方について,
8 / 6 (水) : 教科構想交流と小中連携の実践交流
10 / 30 (木) : 「21世紀型教科学力」について
3 / 24 (水) : 次年度のカリキュラムについて)
- ・各教科ごとに部会を開催(各部会約10回程度)し,教科構想・指導案検討・21世紀型教科学力の設定・授業研究・研究会の運営について・研究反省・次年度の計画などを行った。
- ・研究授業
 - 6 / 16 (月) 理科授業研究 (小学校第4学年)
 - 6 / 18 (水) 体育科授業研究 (小学校第3学年)
 - 6 / 26 (木) 音楽科授業研究 (小学校第6学年:小中TT方式の授業)
 - 7 / 9 (水) 図画工作科授業研究 (小学校第2学年)
 - 11 / 14 (金) 算数科授業研究 (小学校第5学年)
 - 11 / 18 (火) 国語科授業研究 (小学校第4学年,中学校第1学年)
 - 11 / 25 (火) 体育科授業研究 (小学校第6学年)
 - 11 / 26 (水) 体育科授業研究 (中学校第1学年)
 - 2 / 17 (水) 社会科授業研究 (小学校第6学年:小中連携の授業
運営指導委員会提案授業)

⑤教科外学習開発部会

- ・部会開催数・・・29回
(4 / 4・17, 5 / 1・16, 6 / 10・27, 7 / 1・10・28, 8 / 6・19, 9 / 9,
10 / 10, 11 / 5・7・14・21・24, 12 / 26, 1 / 9・15・19・21・30,
2 / 12・19, 3 / 2・12・24)
- ・部会の内容・・・研究の方向性,研究構想検討,研究授業事前研,子どもの活動の感想分析,
一貫教育研究会の運営に関すること,研究会準備,研究開発報告書に関する
こと,カリキュラム検討,次年度の方向性,めざす子ども像について,アン
ケート分析 など
- ・研究授業
 - 5 / 29 (木) 道徳の時間および総合的な学習の時間を中心としたかかわり学習の学習
開発 (小学校第1学年,第6学年)
 - 11 / 11 (火) 総合的な学習の時間および道徳の時間を中心としたかかわり学習の学習
開発 (小学校第3学年,中学校第2学年)
 - 1 / 27 (火) 特別活動を中心としたかかわり学習の学習開発
(小学校第6学年)
 - 3 / 18 (木) 道徳の時間を中心としたかかわり学習の学習開発
(保育,小学校第1・2・3・4・5学年)

⑥クラブ・行事学習開発部会

- ・部会開催数・・・11回

(5/15, 7/30, 8/7, 10/27・31, 11/7・14, 12/4・8, 3/15・17)

・部会の内容・・・今年度の方向性について、研究構想について、小中合同クラブの運営に関することと反省、研究会前日準備、研究会反省 など

⑦調査・評価部会

・部会開催数・・・15回

(4/3・25, 8/1・4・5・19, 10/27, 11/5・10・19・21・27・28, 12/1, 1/16)

・部会の内容・・・分担と方向性、研究計画、提案交流会に向けて、研究会に向けて、年次末評価について など

・メール上での打ち合わせ・・・130件

・8/21(木)・23(土) 各部会研究構想交流会(学園全教職員対象)開催

(6) 研究会事務局会議

研究会開催にあたって、次のような日程で会議を行い、第1年次の研究会実施に向けて活動を行った。(計12回)

- 5/7(水) 事務局の仕事内容について
- 5/20(火) 研究会1次案内について
- 6/1(日) 研究会1次案内について、研究授業枠について
- 6/17(木) 研究会1次案内について
- 7/5(日) 1次案内発送準備
- 7/23(水) 2次案内について
- 7/25(金) 研究会に向けての諸準備
- 9/3(水) 2次案内について、各係の見通しについて
- 9/26(金) 2次案内発送準備
- 9/30(火) 2次案内発送
- 10/24(金) 研究会に向けて
- 10/29(水) 全体研究部会にて研究会の係などについて提案

(7) 幼小中一貫教育公開研究会

第1年次の研究内容の提案の場として、平成15年度幼小中一貫教育公開研究会を行った。

・実施日・・・平成15年12月5日(金)

・実施内容・・・学園研究構想提案(要項およびプレゼンテーション)

各プロジェクト部会による保育・授業提案

各プロジェクト部会による協議会

シンポジウム(国際交流学習開発部会・幼小連携学習開発部会)

講演会(調査・評価部会)

活動写真展示(クラブ・行事学習開発部会)

・参会者数・・・約700名

(8) 「研究開発だより」発行

本学園の全保護者を対象に、研究開発の内容の啓蒙のための「研究開発だより」を発行している。今年度は、次の内容で5回発行した。

- | | |
|---------------|--|
| ・ 5 / 3 0 (金) | No.1 「新しく始まる研究のテーマと概要」 |
| ・ 7 / 1 8 (金) | No.2 「研究内容と研究組織の紹介, 教科外学習開発部会の研究内容及び活動紹介」 |
| ・ 1 / 1 6 (金) | No.3 「国際交流学習開発部会とマルチメディア学習開発部会の研究内容及び活動紹介」 |
| ・ 2 / 1 2 (木) | No.4 「幼小連携学習開発部会と小中連携学習開発部会の研究内容及び活動紹介」 |
| ・ 3 / 8 (月) | No.5 「クラブ・行事学習開発部会と調査・評価部会の研究内容及び活動紹介」 |

(9) その他

学園及び幼・小・中それぞれの研究に対する研鑽を深めるために、次のような取り組みを行った。

<先行研究の資料収集にあたっての国立教育研究所訪問>

- ・ 7 / 3 1 (木) ・ 8 / 1 (金)
- ・ 他の研究開発学校の今までの実践について、資料などの閲覧および収集を行った。
- ・ 参加者・・・4名

<学校訪問>

- ・ 5 / 2 1 (水) 岡山大学附属幼稚園・小学校視察訪問
・ 参加者・・・幼稚園研究主任
- ・ 5 / 3 0 (金) 上越教育大学附属小学校研究会参加
・ 参加者・・・小学校研究主任
- ・ 6 / 2 0 (金) 神戸大学発達科学部附属明石幼稚園・小学校・中学校
・ 参加者・・・中学校研究主任

<指導及び講演>

- 2 / 2 7 (金) ・ 3 / 1 8 (木)
「かかわり学習における道徳教育について」
関西学院大学教職教育研究センター長
関西学院大学大学院文学研究科教授 横山 利弘先生
<内容>講演及び保育・授業提案に対する指導助言
- 2 / 2 7 (金) 「幼小連携における望ましい幼稚園教育のあり方について」
聖徳大学 高梨 珪子先生
<内容>講演及び保育に対する指導・助言
- 3 / 2 (火) 「小学校における国際交流学習を基盤にした英会話学習について」
関西大学外国語教育研究機構 教授
関西大学大学院外国語教育学 研究科長 齋藤 榮二先生
<内容>講演および保育・授業提案に対する指導助言

2

研究開発実施の効果

研究開発を実施しての効果について、研究全体及び各プロジェクト部会における第1年次の研究推進を行って得られた事柄を記述する。ただし、今年度は研究構想の作成及び単元開発の試みが主な研究内容であったため、子どもの実態や学力などの変容等を成果・効果として十分にあげることができていない。

<全体>

- ・各プロジェクト部会において、第1年次の研究計画の柱である研究構想の作成を試案という形ではあるがおおむね行うことができた。
- ・各プロジェクト部会において、研究構想案にもとづく単元開発の試みを行うことができた。

<国際交流学習開発部会>

- ・小学校では、多くの留学生や外国人との交流学习を行うことができたが、その経験を通して子ども達に「外国の言葉をコミュニケーションの手段として使えるようになりたい」という思いが年度当初より芽生えている。また、今年度実施してきた外国の人々との直接的な交流学习は、子ども達が他国の人や文化に出会うだけでなく、自国の文化を見つめ直すことができるものであった。
- ・中学校では、国際交流学習の調べ学習を通して、子ども一人ひとりが自分を生かす活動を選択でき、言語以外のコミュニケーションだけでなく、音楽・運動・料理などの方法で多文化理解を深めたり外国の人々と直接的に交流したりすることができた。このことにより子ども達は、学習に対する満足感を深めることができた。また、子ども達は、外国の人々との双方向のコミュニケーション活動を行う中で、自分自身のコミュニケーションスタイルを客観視する機会を持つことができていた。

<マルチメディア学習開発部会>

- ・実際の授業を通して、様々な教材・単元開発を行うことができた。
- ・単元開発を行う中でTT方式による実践を試みた学年においては、その中で評価の観点の精選を行ったり学習効果をあげたりすることができた。
- ・コンピュータリテラシーとメディアリテラシーの2つの側面でマルチメディア学習を構築することができた。
- ・幼小中のつながりを考えたマルチメディア学習を構想することができた。

<幼小連携学習開発部会>

- ・「表現科」および「環境科」（仮称）を新設し、この2つを中心にして幼小の教育内容の連携を図ることができた。そのため、小学校につながる幼稚園、幼稚園からつながる小学校という見方をすることができた。

<小中連携学習開発部会>

- ・各教科において、「21世紀型教科学力」の設定を行い、教科ごとの21世紀に必要となるであろう学力の方向性を模索することができた。
- ・国語科では、小学校第6学年において中学校指導者と小学校指導者のTT方式での授業を行ったことにより、小学校の子どもたちの学力の実態が小中の指導者間でより明確に把握され、中学校での教育内容の見直しが必要であることに気づくことができた。また、物語教材の指導において、これまでの小学校で行っていた指導のあり方がおおむね適切であることがわかった。
- ・社会科では、小学校第6学年への中学校指導者の乗り入れ指導を行うことができ、小学校第6学年と中学校第1学年の歴史学習の連携の可能性を見いだすことができた。
- ・音楽科では、中学校男性指導者と小学校女性指導者のTT方式の指導を行うことで、それぞれの指導者の特性を生かした連携指導を模索することができた。

<教科外学習開発部会>

- ・社会性についての実態調査をもとに、本学園の子どもたちに育てたい力を明らかにし、「まわりのことを考え、適切に判断し、行動化できる子ども」というめざす子ども像を設定することができた。
- ・教科外学習（道徳の時間・特別活動・総合的な学習の時間）において、他者や集団と出会い、直接的にかかわり合う「かかわり学習」の開発とその実践を行うことができた。

- ・「他者や集団とかがわる力」が効果的に育まれるように、道徳の時間・特別活動・総合的な学習の時間の3方向からの学習開発、あるいはそれらが連携した総合単元的な学習開発を行うことができた。
- ・これまでも小学校で行ってきた異学年交流活動を今年度も実施した。その中で、活動の目標に沿って活動の初め・中間・終了時等で子どもの振り返りや感想を具体的に文章で記述させた。このことから異学年交流活動における子どもたちの心情や満足感、目標の達成の様子を具体化することができた。また、子どもの振り返りなどの文章を分析した結果をその活動以後の新しい単元開発や異学年交流活動の見直しに生かすことができた。

<クラブ・行事学習開発部会>

- ・小学校第6学年の子ども達と中学生との合同クラブを意図的に実施することにより、次のような点が成果として考えられた。これらは、小中学生の活動前後のアンケート調査の結果によるものである。
- ・小学生が中学校進学に向けての人間関係の不安を少なくすることができた。
- ・小学生が中学校生活で大切なクラブ活動を体験することで、中学校生活への見通しを持つことができた。
- ・小学生の中に、「将来自分たちも同じように小学生に教えたい」という思いを持つことができ、この活動がスパイラルカリキュラムとして有効に働く可能性を感じるすることができた。
- ・中学生が小学生とともにクラブ活動を成立させるためのマネジメント能力を高めることにつながった。

<調査・評価部会>

- ・子どもに対する調査・評価では、小学校第3学年・小学校第5学年・中学校第1学年・中学校第3学年を対象に、国際コミュニケーション・学びに対する意識調査、人間関係に関わる調査を実施し、現段階の子どもの実態を明らかにすることができた。
- ・OECDが実施したPISAやクリティカルシンキングに関する参考文献を用いて、思考力に関する調査を行うと同時に、今後実施する表現力・国際理解についての調査・評価計画を作成できた。
- ・プロジェクトに対する調査・評価では、7月及び年度末にプロジェクトキャップとメンバーに対する研究へのビジョン調査を行い、各プロジェクトメンバーの研究開発に対するビジョンの変容を調査した。
- ・8月下旬には、研究提案交流会を行い、各プロジェクトが開発しようとしている内容・計画についての交流・検討・運営指導委員による外部評価を行った。
- ・一貫教育研究会において、参会者に対するアンケート調査を行い、本学園の研究開発に関する意見を収集した。
- ・教職員に対して、プロジェクト制・教科担任制に対する調査を行った。

※ これらの調査・評価の具体的な効果については、調査・評価部会作成資料「平成15年度研究開発実施報告書〈調査・評価部会報告〉」を参照して頂きたい。

3 研究開発実施上の問題点

研究開発を実施しての問題点として、次のような事柄が全体及び各プロジェクト部会からあげられている。このことは、第2年次の研究推進にあたっての改善すべきこととして捉え、次年度以降の研究推進に生かしていく。

<全体>

- ・今年度は、研究構想の作成及び単元開発が主な研究計画であったので、子どもの21世紀型学力の定着を図ることができるような結果を生み出す研究にはなり得ていない。また、結果を生み出すことができるようにするためには、研究の結果を検証できるような視点を確立する必要がある。これらは、第2年次の研究内容として深めていくべき課題と考える。
- ・本学園の研究は、「21世紀型学校カリキュラム」の全体を7つのプロジェクト部会がそのビジョンを共有しながらそれぞれ研究開発するスタイルを取っている。そこで、各プロジェクト部会の開発している学習の横のつながりをもっと考慮しながら、1つの大きな学校カリキュラムとして提案できるようにその内容を作り出していかなばならない。現段階では、本校が提案している学校カリキュラムのビジョンを十分に教職員間で共有できていない部分があると思われるので、今後カリキュラムの全体像を意識

して各プロジェクト部会が研究を進めていく必要がある。

- ・小学校第3学年と第4学年の間にカリキュラムの区切りを入れ、「6年・6年のくくり」の中でカリキュラムを構成しているが、教科等によっては不都合が生じている場合が見られる。また、小学校第3学年までの幼小連携の時期と、小学校第4学年からの小中連携の時期のカリキュラムのつながりを考えねばならない。
- ・「国際的コミュニケーション能力の育成」「幼小中一貫の教育力を生かす」「21世紀型学力」「6年・6年のくくり」など、研究の重点が多岐にわたるため、各プロジェクト部会や全体の研究推進の方向性を十分焦点化することができにくい。今後、もっと研究の方向を焦点化する必要があるように思われる。
- ・学校カリキュラムが細分化されているため、各教科・領域に当てられる授業数が限られており、大きなくくりでの総合的な単元を開発することが難しかった。

<国際交流学習開発部会>

- ・個々の学年における単元開発が主であったことから、今後12年間の系統性を考慮した単元構成を意識する必要がある。
- ・国際交流学習の中学校第3学年段階の子どものめざすべき姿が十分明らかになっていない。また、国際交流学習を通してつけようとする力を設定したものの、それらが発達段階に応じてのものになっているか十分に検討されておらず、具体的な国際的コミュニケーション能力の設定に至っていない。そのため、評価の視点が不十分になっており、国際交流学習を通して子どもたちがどのような力をつけることができなかがわかりにくい。
- ・小学校における英会話学習の導入を試みているが、中学校の英語科などとの教育内容や指導法の上での連携が必要と思われる。
- ・マルチメディアを駆使した授業の展開が見られた。今後は、国際交流学習とマルチメディア学習の連携を図り、総合的に国際的コミュニケーション能力を育成できるような単元開発を行うことができると考える。

<マルチメディア学習開発部会>

- ・幼小中の各発達段階の中で、どの時期にどのような単元を取り上げ、どのような力を身につけることが必要であるかを明らかにする必要がある。
- ・「マルチメディア学習」の単元を開発するにあたり、「国際交流学習」との連携を図りながら総合的に国際的コミュニケーション能力を育成する必要性を感じる。

<幼小連携学習開発部会>

- ・「表現科」・「環境科」（仮称）以外の連携する必要性がある教科や学習内容を吟味する必要がある。
- ・年度途中からのカリキュラム編成および実施となったため、縦断的・横断的に整合していない部分や実践していない部分が多く残されている。そのため、今の段階では、このカリキュラム（試案）が、子どもの学び全体にどのように影響するかを結論づけることはできないと考える。
- ・子どもの経験を階層的に生かすために、幼稚園～小学校第1学年の「表現科」「環境科」（仮称）、さらに小学校第3学年へのつながりを整理する必要がある。また、幼小連携と小中連携の学習開発のつながりを吟味する必要がある。

<小中連携学習開発部会>

- ・各教科ごとに21世紀型教科学力を設定しているが、教科固有のものと各教科共通のものという2つの側面で、21世紀型教科学力を見つめ直す必要がある。また、各教科の設定した教科学力を、何かの視点ごとに統合することができないかを吟味し、今後まとめていくことが求められる。
- ・特に21世紀型教科学力についての子どもの実態把握が不十分であり、今後評価の規準なども含めて、評価のあり方を検討していく必要がある。
- ・TT、小中乗り入れ授業などを行うための、幼・小・中間の時間割編成上の問題や教職員の配置を吟味し、解決しなければならない。

<教科外学習開発部会>

- ・他教科・他領域・学校行事などとの連携を図りながら、学園全体で子どもの発達段階に応じた「かかわり学習」の系統的なカリキュラム作成を行う必要がある。

- ・「他者や集団と豊かにかかわる力」を育てるために必要な単元開発と、評価の観点の見直し及び評価の規準を明らかにする必要がある。

<クラブ・行事学習開発部会>

- ・小学校第6学年と中学校の合同によるクラブ活動は、小学生の実態の変容を引き出すことができたものの、中学生の小学生に対する指導内容を創造しようとする意欲を高めることができなかつたり、日頃の自分たちの運営しているクラブ活動を見直す機会になり得ていなかったりした。つまり、中学生のマネジメント能力の育成に関する点に、十分働きかけることができなかつた。今後は、クラブ活動以外の自伸会活動（児童会・生徒会活動）及び学校行事の面にもアプローチを行い、子ども達の人間関係力を育成するようにする。

<調査・評価部会>

- ・この部会の果たすべき大きな役割である子ども達の実態調査や、子ども達の学力の定着や変容を捉えるための調査・評価活動を十分に行うことができなかつた。第1年次は、各プロジェクト部会の研究構想作成の段階であったため、子どもの実態や学力に関する評価の焦点化が難しかったことが理由としてあげられる。
- ・調査・評価部会が行い、明らかにした調査・評価の成果を、全体の研究に十分反映させることができている。今後は、全体の調査・評価で見えつつある一貫教育の集約されつつある方向性を、全体にフィードバックできるような調査を行う。また、各プロジェクトの特色を生かしつつ、研究全体あるいは各プロジェクトの研究の焦点化を促すことができるような働きかけを行う必要がある。
- ・各プロジェクト部会の研究の評価に対する意識啓蒙ができるような動きが必要である。

※ これらの調査・評価の具体的な問題点については、調査・評価部会作成資料「平成15年度研究開発実施報告書〈調査・評価部会報告〉」を参照して頂きたい。

4 運営指導委員会での指導・助言の内容

今年度の研究内容に関して、3回の運営指導委員会の中で、運営指導委員の先生方より多くのご指導をいただいている。このことは、今後の本学園の研究開発のあり方に関して大変大きな方向性を示すものである。ここでは、第3回運営指導委員会での意見及び指導内容について記述する。

<全体に関わって>

- ・小学校第3学年と第4学年に区切りを入れ幼小連携・小中連携の6・6制を導入しているが、小学校第3学年と第4学年の間のつながりを考えていく必要がある。

<「国際コミュニケーション」に関して>

- ・「国際交流学習」と「マルチメディア学習」の二本化されたカリキュラムでは、配当時間を細分化し大胆な単元構成をすることが難しい。二つの学習を総合的・融合的に扱う単元の構成ができるようなカリキュラムにする必要がある。
- ・この学習で何の力をつけようとしているのかを具体的に示し、実際に子ども達はその力を身につけることができるような学習を展開する。子ども達が学習の中で立ち止まり、課題の解決に悩むような場面を設定し、それを追求していく中で子ども達が力を伸ばしていくことができるような学習が展開できないか。
- ・小学校の英会話学習と中学校の英語科との関連・連携を図る。
- ・21世紀の国際化とは、多元的な価値を超えてみんなが一人の人間として受け止められる感覚を持つことである。これは、外国の人との交流だけではなく、自分以外の人（身障者など）とのコミュニケーションについても考えていくことが大切である。

<「保育・教科学習」に関して>

- ・小中の指導者間でのTT方式の指導法の研究が必要である。小中の指導者が必要な授業であるかどうか、教育内容での連携を図る必要があるのではないかと、などいろいろな角度から検証していく。
- ・21世紀型教科学力を構成する視点（不易と流行、教科固有と共通など）を明らかにし、整理する必要がある。

・カリキュラムの全体像と21世紀型教科学力の整合性を図る必要がある。

<「かかわり学習」に関して>

・特別活動のねらいや目標を見つめ直し効果的な位置づけを図る。また、総合的な学習の時間の位置づけがかかわり学習の中でよいのかを検証するなど、カリキュラムの全体構成の見直しを図る必要があるのではないかと。

<「調査・評価」に関すること>

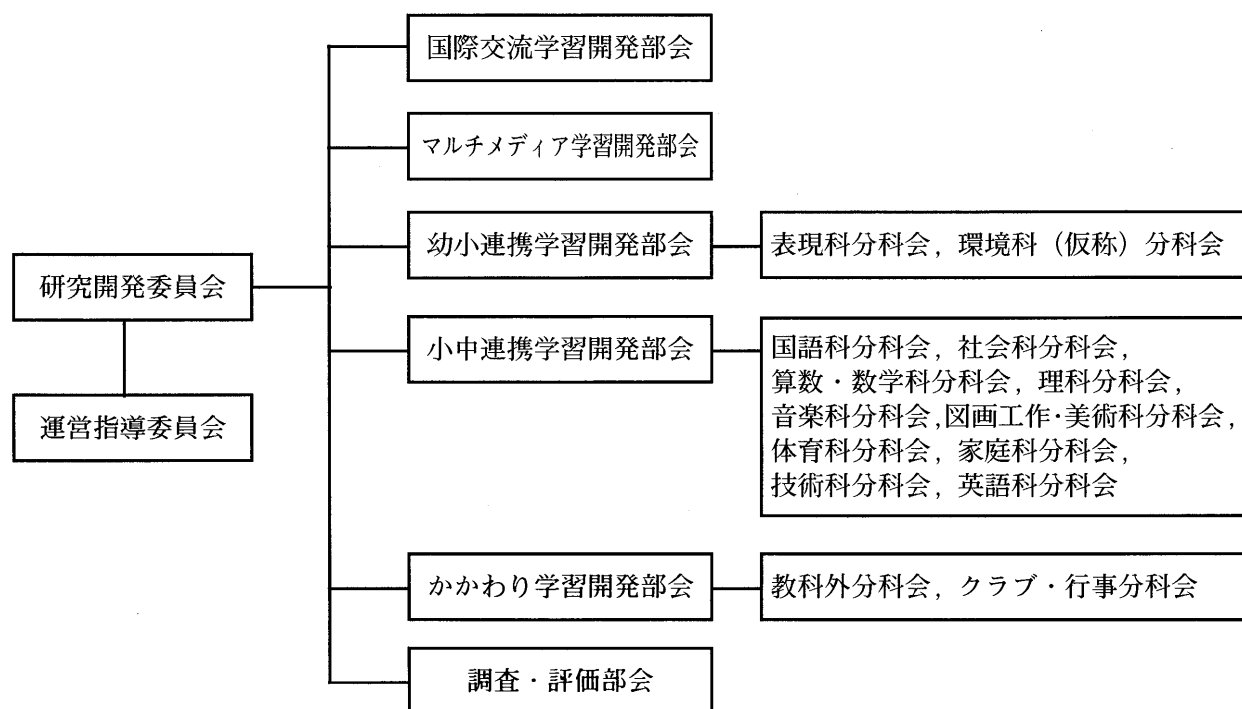
・1年間の組織の診断評価を行う必要がある。
・子どもの学力の実態把握を行うために、自己評価・自己点検・子どもや保護者の外部評価・客観的外部評価など、多様な方法を取り入れる必要がある。

5 今後の研究開発の方向性

今後は、初年度提出した研究開発計画書に沿って第2年次の研究を進めていく。また、前項の研究開発上の問題点及び運営指導委員会の指導・助言を受けて、次年度の研究の方向性を一部修正するものとする。

<第2年次の研究の方向性の修正点>

・各プロジェクト部会の研究内容にかかわりを持たせるために、「教科外学習開発部会」と「クラブ・行事学習開発部会」を統合した「かかわり学習開発部会」を新設し、7プロジェクト部会から6プロジェクト部会に研究推進のプロジェクトを削減する。



「H16年度研究組織図」

・各教科・領域などの授業時間を確保し教育内容を確実に身につけさせるために、小学校の各学年の授業の総時数を学校教育法施行規則に定められた時数より18～50時間多く設定する。
・国際交流学習とマルチメディア学習の関連を持たせ、その中で国際的コミュニケーション能力を総合的に育成するための試みとして、まず第2年次は中学校において領域「国際コミュニケーション」の時間を35時間増やし、中学校第1～3学年までの「国際コミュニケーション」の時間を105時間とする。

本学園の教育課程表

広島大学附属三原幼稚園 教育課程表（平成16年度）

年少児	1期		2期		3期		4期		合計		
	2		3		4		3		12		
年中児	5期		6期		7期		8期		合計		
	3		5		5		4		17		
年長児	9期		10期		11期		12期		13期		合計
	3		5		5		4		3		20

幼稚園においては、各期における主に国際コミュニケーションの学習にかかわる活動が主となる日を日数として示したものである。幼稚園の活動は総合的に行われるもので、日常のなかで行われている活動は含まれない。

広島大学附属三原小学校 教育課程表（平成16年度）

	教 科										国際コミュニケーション		かかわり学習			合計
	国語	社会	算数	理科	環境 (仮称)	音楽	図工	表現	体育	家庭	国際 交流	マルチ メディア	道徳	特別 活動	総合	
1年	255 (-17)		114		85 (-17)	(50) (-18)	(50) (-18)	146	80 (-10)		68		34	34	16	832 (+50)
2年	263 (-17)		155		88 (-17)	(50) (-20)	(50) (-20)	150	80 (-10)		70		35	35	16	892 (+52)
3年	218 (-17)	70	150	70		60	60		90		70		35	35	70 (-35)	928 (+18)
4年	218 (-17)	85	150	90		60	60		90		70		35	35	70 (-35)	963 (+18)
5年	163 (-17)	90	150	95		50	50		90	60	70		35	35	75 (-35)	963 (+18)
6年	160 (-15)	100	150	95		50	50		90	55	70		35	35	75 (-35)	965 (+20)

広島大学附属三原中学校 教育課程表（平成16年度）

	必 修 教 科										選 択 教 科	国際コミュニケーション		かかわり学習			計
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健 体育	技術 家庭	英語	国際 交流		マルチ メディア	道徳	特別 活動	総合		
1年	120 (-20)	105	105	105	45	45	90	50 (-20)	105	0	105		35	35	35 (-65)	980	
2年	85 (-20)	105	105	105	35	35	90	55 (-15)	105	50 (-20)	105		35	35	35 (-50)	980	
3年	85 (-20)	85	105	80	35	35	90	30 (-5)	105	120	105		35	35	35 (-80)	980	

- ・幼小連携学習開発部会では、特に新設した「表現科」及び「環境科」（仮称）を中心にした幼小連携の
カリキュラム開発及び評価の観点及び規準作りを行う。
- ・子どもの学力向上の実態把握時期を、「学年末」から「学年初め」に変更する。

本学園の21世紀型学校カリキュラムの全体像

		年少	年中	年長	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3			
国際 コミュニケーション	国際交流 学習	自国文化・人とのコミュニケーションを大切に保育			多文化理解を中心とした学習			コミュニケーションスキルの向上を中心とした学習			コミュニケーションスキルを生かした多文化理解の学習					
	マルチメディア 学習	メディアに出会う保育			メディアに親しむ活動			メディアを具体的に活用する活動			情報の科学的な理解に基づくメディアの体験的活動					
保 育 ・ 教 科 学 習	<学級担任制および体験学習を中心とした基礎的な学習>															
	保 育 ・ 教 科 学 習	保 育 ○総合的な活動 ・言葉 ・環境 ・表現 ・健康 ・人間関係						国語科			国語科					
								環境科（仮称）			社会科			社会科		
											理 科			理 科		
								算数科			算数科			数学科		
								表現科			音楽科			音楽科		
											図画工作科			美術科		
								体育科			体育科			体育科		
														家庭科		
														技術科		
											英語科					
か か わ り 学 習	道 徳	道徳性の芽生え			道 徳			道 徳								
	特別活動	特別活動			特別活動			特別活動								
	総合的な 学習の時間							総合的な学習の時間								
	クラブ活動							クラブ活動								
	学校行事	学校行事（学園行事・自伸会活動）														

<第2年次の研究の方向性>

- 園児・児童・生徒の国際的コミュニケーション能力の育成を図り、言葉や文化の異なるさまざまな人々とかかわる力を身につけるために、第1年次に新設した幼稚園から中学校までを一貫した「国際コミュニケーション」の時間を第2年次の今年度も引き続き深める。第2年次における「国際コミュニケーション」の時間は主として次のような教育内容・方法で運用する。
 - ・「国際交流学習」として広島大学の留学生、ALT、姉妹校Martin Middle Schoolの生徒、Wahl Coates Elementary Schoolの児童、ザンビアのペンパル、海外からの視察団との交流など、外国の人々との直接的な触れ合いを通して、多文化理解を図る。具体的には自国と他国の文化を尊重する気持ちを育てるために、発達段階に応じて和楽器や料理、遊び・スポーツ、茶華道、書道などに親しむさまざまな体験活動を行う。
 - ・「国際交流学習」として身近な生活の中で使うことばを用いたコミュニケーション活動を通して、幼・小段階からの発達段階に応じた豊かな外国語会話能力を育てる。
 - ・「マルチメディア学習」としてコンピュータやテレビ、新聞などを活用して、自国のこと、自校のこと、自分のことについて国内外の人々に情報を発信し、相手と双方向に情報を共有する活動を通して、情報リテラシーの育成をはかる。
 - ・「マルチメディア学習」としてコンピュータを中心にテレビ、新聞などのメディア学習を通して情報活用能力の獲得に向け、幼稚園ではメディアに出会い、小学校低学年ではメディアに親しみ、高学年ではメディアを具体的な活用をし、さらに中学校においては情報の科学的な理解をもとに体験的活動を行う。
 - ・なお中学校における「国際コミュニケーション」の時間数を第1年次よりも35時間増やし、105時間とする。第1年次には異なる分野としてすすめてきた「国際交流学習」と「マルチメディア学習」であるが、将来的には両者が総合的に展開されることが必要となってくると考えている。例えば、国内や海外の学校とコンピュータやインターネットを用いてコミュニケーションすることで、相互理解

を深めたり共同作業をしたりする際、そこには文化的・自然環境的差異があり、ある程度の時間を要する。つまり、マルチメディアを活用した国際交流を実際に外国の生徒と行うための学習に時間が必要となってくるため、時間数を増すこととする。また、パソコンを使っての情報交換にとどまるだけでなく、共通のテーマに沿って課題解決を行ったり新しい文化や他者認識のあり方を創造したりすることに着目することで、新たな国際的コミュニケーション能力を育成するための単元開発やカリキュラム開発を行いたいと考えている。

- 3歳児～小学校第3学年までは、体験学習を取り入れた保育・授業を実践していく中で、表現力、認識の側面を中心に6年間の中で一貫して育てたい力を設定している。その力の育成のために、「表現科」及び「環境科」（仮称）を新設した幼・小での経験が階層的に生かされる幼小一貫カリキュラムの開発を進めていく。
 - ・小学校第1学年～第2学年では、音楽科・図画工作科・体育科の一部を同一の枠組み内に統合し、新教科「表現科」を新設した。幼稚園・小学校低学年の時期に多様な体験を通して諸感覚を十分に活用し磨くことにより、子どもの諸感覚は平行して総合的に活用されることとなり、その中で子どもたちは様々な表現方法を行いながら豊かな表現力を身につけることができる。そこで、諸感覚を用いる活動や多様な表現活動を柔軟に構成することができるような教科が必要であると考えた。これは、幼稚園での「総合的に子どもの力を育む」という教育理念を小学校低学年に引き継ぐものでもある。そこで今年度は、小学校第1・2学年の「表現科」の中での総合的な表現活動を行う単元及びカリキュラムの開発を行いながら、それらが小学校第3学年の音楽科・図画工作科・体育科へとつながる力となるような教科のあり方の研究を進めていく。
 - ・小学校第1学年～第2学年では、身のまわりの自然や地域社会にかかわる体験活動を通して、自然や地域社会の事象への認識の芽を中心に育てていくために、新教科「環境科」（仮称）を新設した。生活科の内容を基礎に、目標に即して軽重をつけるとともに、幼稚園での保育内容や小学校第3学年での教育内容を勘案し、「飼育・栽培」「遊び（物を使った遊び・自然を感じる遊び）」「公共」「仕事」の4つの側面から活動を構成していく。そこで、今年度は、構想に基づいての単元及びカリキュラムの開発を進めていく。
- 小学校第4学年～中学校の教科学習においては、広島大学教官との共同プロジェクトとして実践的研究を行い、小中連携の教育力を生かした学習指導法の研究開発を行う。具体的には第1年次に設定した21世紀型教科学力をふまえて小中一貫カリキュラムの作成と評価の観点及び評価の規準の設定を行う。その際には、現行の学習指導要領で示されている教科学力の評価の観点もふまえながら、21世紀に新たに必要とする教科学力の評価のあり方の研究を進める。また、21世紀に求められる学力を効果的に身につけさせるために、小中の指導者によるTT方式や児童生徒の合同学習等の指導法について研究を進める。
- かかわり学習では、「教科外学習」と「クラブ・行事」において相互の関連性も考慮しながら、感動体験を重視した社会性を育成していくためのカリキュラム開発を進めていく。
 - ・教科外学習を中心にしたかかわり学習では、超少子化に対応した社会性を育成することを目的に、教科外活動（道徳・特別活動・総合）における「かかわり体験」を重視したカリキュラム開発とその実践を行う。具体的には、第1年次を受けて活動プランの修正と開発などの実践研究を行い、幼小中連携の教科外学習における「かかわり学習」のカリキュラムの作成と学習指導法の研究開発及び評価の規準づくりを行う。
 - ・クラブ・行事を中心にしたかかわり学習では、小・中の自伸会（児童・生徒会）執行部同士の交流を深めるような実践や組織編制を行う。三原学園の行事については、幼小中が連携するような行事の改革案に着手する。また、クラブ活動については、小学校第4学年まで学年を下げた交流を行い、定期的に交流をするための日程調整や、活動計画を立てていく。
- 研究成果の評価を行うために、学力調査や質問紙調査、外部評価を実施する。具体的には
 - ① 小学校第3学年、小学校第5学年、中学校第1学年、中学校第3学年に対する外国語会話能力や情報活用能力についての継続的な調査
 - ② 小学校第3学年、小学校第5学年、中学校第1学年、中学校第3学年に対する教科の基礎学力や関

- 心・意欲・態度についての継続的な学力調査および質問紙調査
- ③小学校第3学年，小学校第5学年，中学校第1学年，中学校第3学年に対する社会性の変容についての外部評価や行動観察などの評価等を行う。